Bグループの少年3

第一章　悪い噂（うわさ）はいい噂？

「桜木亮（さくらぎりょう）って、このクラスだって聞いたけど、どこ？」
三時間目の授業が終わった休み時間に、一人の男子生徒が亮の教室に入って来た。
男子生徒は顔が広いらしく、違うクラスであるのに何人もの生徒から声をかけられている。
彼は、その内の一人に亮の居場所を尋（たず）ねた。
問いかけられた本人や周辺の生徒が、「あそこ」「あの寝てるやつ」などと指差したので、男子生徒は「桜木亮」の席がすぐにわかった。
教えてくれた生徒達に「ありがとう」と軽く手を振りながら、示された席へと向かう。
そこには、机に突っ伏して寝ている亮がいた。
男子生徒は亮をちらっと見てから、近くにいる別の男子に声をかける。
「よう、小路（しょうじ）」
「ああ、野村（のむら）か」

亮の前の席で雑誌に目を落としていた小路明は、野村という男子生徒と知り合いだった。
しかし明は挨拶もそこそこに、亮に目をやりながら野村に尋ねる。
「亮に何か用事か？」
明が親しそうに亮の名を呼んだので、野村は意外に感じた。声にもその気持ちが表れる。
「……お前ら、友達なのか？」
「まあな。同じクラスなんだから、別段、不思議なことでもないだろ？」
明がそう答えても、まだ納得いかない野村であったが、気を取り直すように首を振った。
「で、これが桜木亮？」
本人を前にして――寝ているとはいえ――失礼な聞き方であるが、明はいちいち指摘せずに頷く。
「ああ……亮に用事があるなら、起こしたらどうだ？」
明が小さく笑うと、亮の手がピクッと動いた――が、傍で話している明と野村は気づかない。
「そのつもりだ……おい、起きろよ、桜木」
野村は亮と初対面のはずなのに、かなり乱暴な物言いだった。桜木亮など大した男ではない、と言わんばかりだ。
すると、亮がゆっくりと頭を起こした。
珍しいな、と器用に片眉を上げる明を、亮は半目で睨んだ。なぜ安眠を妨害するんだ、と明に抗議しているのである。

言葉にせずとも、その意はしっかりと伝わった。明は、野村にわからない程度に苦笑する。
亮はあからさまなため息をつくことで自分の心情を訴えてから、不意の訪問客に目を向けた。
（……いかにもAグループです、ってツラしたやつだな）
亮の野村に対する第一印象はそれに尽きた。
野村は自分にかなり自信があるのか、馬鹿にしたように亮を見下ろしている。
さて、こいつは何しに来たのか。何となく予想はつくが……と亮が考えていると、野村が先に口を開いた。
「お前が桜木亮か？　……藤本さんと付き合っているっていう、あの桜木亮？」
その言葉には不審の念がありありとにじみ出ていた。「信じられない」という声が聞こえてくるようだ。
「……あのが何を指すのかは知らないが、俺がその桜木亮だ。何か用か？」
亮は、恵梨花と付き合っているという意味で「その」と付けた。
すると、野村は小さく舌打ちをする。
「やっぱりな……名前聞いても、全然顔が思い浮かばないと思ったら案の定だ。見ても記憶に残らないこんな地味なやつに、なんで藤本さんが……」
これは亮に言ったわけではなく、思わず漏れてしまった本音である。
周辺にいたクラスメイト達は、喧嘩が起きやしないかとざわめいた。期待をこめて楽しそうに眺

めている者達もいれば、心配そうに見守る者達もいる。
対して亮は、表情を抑えるのに必死だった。苛立（いらだ）ち——ではなく、嬉しさから顔が崩れそうになるのを堪（こら）えていたのだ。
「見ても記憶に残らない」「地味」という感想は、まさしく日頃の努力の賜（たまもの）ではないか。とはいえ、恵梨花との関係が知られた今となっては、もはや意味のないものかもしれないが。
こいつは案外いいやつかもしれん、などと思いながら、亮は肩を竦（すく）める。
「特に秀（ひい）でたものもないんでな」
さして表情に変化を見せず、飄々（ひょうひょう）と返す亮。
野村にはそれが余裕ありと見えたのか、いかにも気に食わないといった表情を浮かべたあと、すぐにそれを隠して鼻で笑った。
「ハッ、自分から無能宣言するなんて、馬鹿じゃねえの？」
（……いや、普通だろ。それに、秀でたものがないと言ったからって無能扱いとは、随分（ずいぶん）と突飛（とっぴ）な考え方をするやつだな……まあ、どっちでもいいけど）
亮からしたら、普通のやつと思われることが一番好ましい。そして、すごいやつと思われるよりは、無能なやつと思われるほうがいい。そのほうが面倒事を避けられるからだ。
ここは自分に貼（は）られた無能レッテルを肯定すべきか、いや、無能ではなく普通なのだと反論すべきかと、亮は少し悩んでしまった。

そんなアホな葛藤（かっとう）が繰り広げられているなど、野村には想像もつかない。野村の目には、亮は言い返すこともできずに口ごもっているだけ、に映った。
「一言も言い返せないってか……こんなんじゃ、藤本さんにフラれるのも時間の問題だな」
鼻白（はなじろ）んだ顔でそれだけ言うと、野村はアッサリと亮に背を向け、教室から出て行く。
一部始終を興味深そうに見ていたクラスメイト達は、喧嘩（けんか）が起こらなかったことをつまらなく思う者、何も起こらずホッとする者の二つに分かれた。

「……何も言い返さなくてよかったのか？」
結局、あの男は何しに来たのだろうかと訝（いぶか）しむ亮に、明が尋ねた。
「言い返すというよりもな、ちょっと悩んでるうちに帰りやがった」
「……？　何を悩んでたんだ？」
「無能だと言われたことを肯定するか、普通だと反論するか」
亮は今もその選択に迷っていて、難しい表情をしている。
「……その二択で？」
「そうだ」
呆（あき）れたように問うた明は、亮がさも当然と頷いたので、より一層呆れてしまった。あんぐりと口を開けている。

が、次第に明は肩を震わせ始めた。
「亮。お前って……」
「なんだ」
「見てて飽きない……面白いな、本当に」
かすかに声を震わせて言う明に、亮は顔をしかめ、不満そうに反論する。
「馬鹿言うな。普通だろ、俺は」
「いやいや……まあ、お前がそう言うなら、それでいいけど」
亮はついに、そっぽを向くように窓に目を向けた。
そんな亮の態度に明はふっと笑うと、やや真面目な口調で続ける。
「野村のことだけどな……」
「野村って、さっきの剣道野郎のことか？」
「そう……うん？　名前知らないのに、剣道部だって知ってたのか？」
明は首を傾げた。
「いや、俺が知るかよ」
「でも今、剣道野郎って言っただろ」
「剣道野郎ってのは、剣道をやってる野郎のことで、剣道部に入っているかどうかなんて、俺が知るかよ」

「……じゃあ、何で剣道をやっているって、わかったんだ？」
「……剣道っぽい顔してたじゃねえか」
説明するのが面倒だと思った亮は、あからさまに適当に答えた。これは説明しようにも、けっこう難しいのだ。
そんな誰が聞いても納得いかない答えに、明は抗議するでもなく、ただ静かに亮を見返した。
「……」
「……」
短い沈黙のあと、明の目が笑い始める。すると亮は、またも明からゆっくりと目を逸らした。そんな亮の口元も軽くヒクつき、笑いが零れている。
「……剣道っぽい顔なんだな？」
明は無理をして作ったような、真剣味を帯びた声を出した。
「その通りだ」
亮は笑いを堪えたまま、渋面で頷く。
二人の間をまたも沈黙が支配する。
やがて二人の肩が震え始め、「ぷっ」と噴き出す音と共に、揃って爆笑し始めた。
クラスメイト達は、何やら真顔で話し込んでいた二人から突然上がった大きな笑い声に、首を傾げている。

「なんだ、その、剣道野郎の野村なんだがな」
明が涙目を擦りながら言う。
「おう、剣道野郎がどうした」
爆笑して乱れに乱れた荒い息をどうにか整える亮だったが、二人して「剣道野郎」と口にしたことにより、またも笑いの発作に襲われそうになった。亮はなんとかそれを抑えこむ。
「野村も根は悪いやつじゃないんだよ。ただ、一年の時から藤本さんに惚れてるって噂だからな……だから、あんな態度をとったんだろうな」
あんまり悪く思ってくれるな、と明は言いたげだ。
「恵梨花にか……で、友達なのか？　明と剣道野郎は」
「友達ってほどでもないな……顔見知り程度だ。積極的にかばいたくて言ってるんじゃなくてな……本当に、普段はそれほどひどいやつでもないんだよ。藤本さんがお前と付き合ったから、あんなふうになったんだろうな。だから、野村の言ったことはあんまり気にしないでやってくれ」
「ふうん……というか、別に気にしてなんかねえぞ？」
「……ああ。そうだったな」
実際、亮は野村に対して、怒りどころか何の感情も露わにしていない。明もそれを思い出し、呆れつつも頷いた。
亮がポツリと呟く。

「今のところ俺が気になっているのは、剣道野郎のことじゃなくてな……」
「なんだ？」
亮は悩ましげに眉を寄せ、物憂げに窓の外へと目をやった。
「あいつと同じように恵梨花に惚れている男が、あとどれだけいるかってことだな」
きっと山ほどいるだろうなと思う明だったが、あえて何も言わずにいた。

◇◆◇◆◇◆◇

昼休み——亮は弁当の入った鞄を片手に、屋上へ行こうとした。先ほど起こったことに、ため息をつきながら。
教室を出ようとする寸前、亮はクラスの男子数人に突然囲まれてしまった。ろくに話したこともない連中からいきなり昼飯を一緒に食べないかと誘われたので、亮はかなり戸惑った。
「先約があるから」と断っても、クラスメイトは興奮したように「一緒で構わない」と言う。
亮が呆れて「約束した相手のほうが構うだろ」と言い返せば、彼らは少し口ごもって「どこで食べるんだ？」と聞く。
亮は思わず「屋上だ」と答えそうになったが、朝に恵梨花から伝言された梓の忠告を思い出し、「生

徒会室だ」と嘘をついた。
　すると彼らは、いかにも残念そうに、しぶしぶ離れていったのである。
　まさか、あいつら……と亮が考えていると、明が呆れた様子で「お前と一緒にいることで、藤本さんらと話したかったんだろうな」と推察した。
　亮は同時に、こうなることを予測していた梓について、さすがだなと感心する。そして、いつまでこんな状態が続くのかと考え、ついため息を零した。
　とはいえ、亮はすぐに気持ちを切り替える。
　気持ちの切り替えは割かし簡単だった。
　なぜなら今は昼休み。朝から待ちに待った、恵梨花の手作り弁当を食べられる時間だからである。
　今朝恵梨花から二人分の弁当を預かっていたので、一人で早弁したいという誘惑に、何度駆られたかわからない。
　確実に美味いと知っているから、我慢するのはかなりきつかった。
　そこで亮はふと思った。屋上に行くのを随分久しぶりに感じている自分がいるな、と。屋上に行かなかったのは、先週一週間だけなのにもかかわらずだ。
　あの三人と昼の弁当を食べるのが当たり前のような感覚になっていると今更ながら気づいて、軽く驚いてしまう。
　最初のうちは強引に誘われて仕方なくだった。「目の保養になるなら、まあ、いいか」と自分を納得させていたのも、ずっと昔のような気がする。
　亮は自分の心境の変化を認め、苦笑した。そして、屋上へ出る扉を開く。
「亮くん！」
　扉の金属が擦れる音で気づいたのか、扉を開けた先から、恵梨花が大声で亮の名を呼んだ。
　声がする方向へ目を向けると、恵梨花が太陽を背にして、笑顔で手を振っている。
　その隣には、微笑を浮かべた梓、そしていつものように無表情の咲もいる。
　亮は軽く手を振り返すと、シートの上に座る三人に向かって歩を進めた。すると、妙に照れ臭くなってくる。
　屋上で三人と昼食を共にするのが久しぶりだからか、あるいは他の要因もあるのか……亮はそんなことを考えながら、三人に声をかけた。
「悪いな、待たせたか？」
「ううん。そんなに……だけど亮くんが後から来るなんて珍しいね？」
　恵梨花の言う通り、亮が恵梨花達より遅れて屋上に来るのは珍しい。というよりも、初めてのことだ。
　その原因は間違いなく、教室を出ようとする亮に話しかけ、恵梨花達と一緒に昼を食べようと企んだ下心ある男子達のせいだが、それをここで言うつもりはない。
　亮が「ああ、ちょっとな」と言葉を濁すと、梓が何かを察したように尋ねてきた。

「あたしの伝言は役に立った？」
「ああ、バッチリな……助かったぜ、ありがとよ」
「そう。それはよかった」
　そんな二人のやり取りに恵梨花は小首を傾げるも、何も聞かずに亮から鞄を受け取り、弁当箱を——もとい重箱を広げ始める。
　亮が靴を脱いでシートの上に座ろうとすると、先ほどからジッとこちらを見上げている咲と目が合った。それでも何も言おうとしない咲の表情を見ていると、亮には彼女のして欲しがっていることがわかったので、苦笑しながら咲の頭を撫(な)でてやる。
「よう、咲」
　すると咲は気持ちよさそうに目を細めた。
　恵梨花はその光景を羨(うらや)ましそうに見て、少し拗(す)ねたような顔をした。しかし咲があまりに嬉しげなので、「まあ、いいか」と小さく息を吐いた。
　どうやら撫でて正解だったようだと、亮は安堵(あんど)しながら腰を下ろした。恵梨花と咲の間、梓の正面にである。
　そうして三人娘を視界に収めた亮は、「やっぱり目の保養になるな」と思ってしまう。教室の中でなく人目のないところだったので、亮は気分も落ち着き、「目の保養」を十分に堪能(たんのう)した。
「……話には聞いていたけど、改めてこうやって見ると、すごい量ね」

　広げられた重箱を見て、梓が呆れ顔で感想を漏(も)らす。横にいる咲もコクコクと頷いている。
「……確かに、そうかもな」
「でも、本当に亮くん、全部食べるよ？」
　そう告げる恵梨花の表情は、けろっとしていた。
「全部じゃないだろ。恵梨花も食べるだろ？」
「そうだけど、私がいなくても亮くん、全部食べられるよね？」
「……食べられるな」
　亮は「楽勝」との回答を導き出した。なぜなら、恵梨花は食べたとしても、いつもほんの少しだからだ。
「まったく、本当にふざけた胃袋ね」
　やれやれと首を横に振る梓に、亮は肩を竦めて返した。
「はい、お皿とお箸(はし)」
　恵梨花が簡素な造りのプラスチック皿と、黒塗りの箸を亮に差し出す。
　これまでと違い、紙皿や割り箸でなかったので、亮は「ん？」と疑問に思い、説明を求めて恵梨花を見た。
「使い捨ての割り箸や紙のお皿だと、もったいないじゃない？　だから亮くん用に買ってきたんだけど……気に入らない？　その食器」

言われてみればもっともな話だ。
これからもたびたび弁当を作ってもらうなら、使い捨ての食器を使うのは不経済であり、エコにも反する。
「ああ、そういうことか。いや、別に食器にこだわってる訳じゃないからいいけど……じゃあ、後で金払うな、ありがとな」
「うん」
少しホッとした様子の恵梨花から視線を移し、亮は改めて自分の手にした食器を眺めてみた。
すると、わざわざ自分のために食器を買ってきてくれたことに対する妙な気恥ずかしさが湧いてきて、それが顔に出ないようにするのに骨が折れた。
しかし、完全には隠しきれなかったようで、梓が亮を見てニヤニヤと笑みを浮かべている。
おもちゃにされてたまるか、と亮は梓と目を合わせないようにした。
そんな亮の頑(かたく)なな態度に梓はかすかに笑っていたが、次に恵梨花が取り出した食器を見て眉をひそめた。
恵梨花の皿は亮が持っているのと同じ物で、箸は色違いの赤色だった。一目でお揃いだとわかる。
亮の分を買うついでに自分のも一緒に買ったのだろうと推察されるが、二人並んで同じ食器を手にするのはいかがなものか、と梓は思う。
「君達、まるで――」

つい、といったふうに梓が口走ると、亮と恵梨花が揃って顔を上げた。
「何だ？」
「何？」
聞かれた梓は、やや躊躇(ためら)った後に首を横に振る。
「……いえ、いいわ。あたしが無粋(ぶすい)だったみたい」
「？」
同時に首を傾げる二人に、梓が小さくため息をついた。
すると、咲が梓の耳元に手を添(そ)えながら、二人に聞こえないように何やら小声で囁(ささや)いた。
梓はクスリと笑いながら、「まったくね。あたしもそう言おうと思った」と頷く。
梓が珍しく素直な笑顔を見せたので、亮はやや驚いた。一方恵梨花は、咲と梓が何をひそひそ言い合っているのかと不思議がっている。
さすがの梓も、付き合い始めたばかりのカップルを前に、「まるで夫婦みたい」とは言えなかった。
からかうネタとしてはなかなかのものだが、それはもっと後になってからのほうがいい。
恵梨花がようやく用意を終えると、四人は声を揃えて「いただきます」と唱和し、食事を始めた。
「……美味(うま)いです、恵梨花さん」
一口目を咀嚼(そしゃく)した亮の第一声である。
「うん、ありがとう。でも、なんでそんな他人行儀(たにんぎょうぎ)な丁寧(ていねい)口調？」

恵梨花は笑いを噛み殺している。
「わからん。なんか自然に出てきたというか」
「そうなんだ？」
「そうなんだ」
亮はおもむろに頷いた。
「どういう会話よ……」
呆れたようにボソッと突っ込んだ梓にしても、今にも笑い出しそうな顔である。咲もクスクス笑っている。
「あ、そうだ恵梨花。ほら、これ」
そう言いながら、亮は写真の入った封筒を胸ポケットから取り出した。
「何？　これ」
「先週、教室で撮った写真。デジカメで撮って、プリントしたやつだ」
「ああ……ええと、眼鏡かけた……夏山（なつやま）くんだっけ？」
「よく覚えてるな」
亮の声には感嘆の響きがあった。
「自己紹介してもらったじゃない？」
「そりゃ、そうだけどな……」

というのも、亮は複数人に一斉に自己紹介されると、一人として名前を覚える自信がない。いや、もしかしたら一人ぐらいは覚えられるかもしれないが。
あの日、恵梨花に自己紹介した人数は、明、夏山、川島（かわしま）、東（ひがし）の四人である。
まさかその全員を覚えているなんてことはないだろう、と亮は思う。しかし実際は、恵梨花は亮に紹介された友人だからこそ、必死で覚えたのだ。
「すごく綺麗に撮れてるね」
封筒から写真を取り出し眺めていた恵梨花が、喜びと感嘆が半々というような声を出した。
「最新のデジカメらしいからな」
「へえ。あたしにも見せて、恵梨花」
やはりと言うか、恵梨花を撮ることにおいては第一人者である梓が、興味津々の様子で写真を覗き込む。
「はい」
「本当に……綺麗に撮れてるわね。もう一枚も見せて」
「ん」
二枚目を手にした途端、梓の目つきが鋭くなったと亮は感じた。
じっくり二枚の写真を見比べながら、梓は写真から目を上げずに亮に問いかける。
「亮くん」

「なんだ？」
「こちらのツーショット写真だけ、焼き増ししてくれるよう頼んでもらってもいい？」
「……わかった」
それだけで亮は確信した。
梓は二枚の写真から、恵梨花の表情の違いを見抜いたのだ。確かに、ツーショットのほうに写っている恵梨花には、何度見ても亮はドキッとさせられていた。
しかし、亮が夏山からもらったような拡大プリントでもないのに、その違いに気づくとはなんて女だ、と亮は梓の観察眼の鋭さに舌を巻いた。対象が恵梨花だから、というのもあるかもしれない。
「ねえ、これの印刷代っていくらだったの？」
恵梨花が鞄から財布を取り出して尋ねる。
亮は、写真はボウリング場で撮ったプリクラと交換でもらったから、印刷代はいらないことを説明した。
恵梨花はそれでも悩んでいる様子だったが、「それなら今度改めてお礼を言えばいい」と亮が提案すると、どうにか納得した。
しかし、恵梨花が礼を言いに来るとなると、また教室中が騒ぎになるだろう。
亮はあまり深く考えないようにして、目の前のごちそうに集中することにした。
亮が猛スピードで弁当の中身を平らげていくと、それに応じて梓と咲の呆れ具合が増していく。

亮はそんな二人を一向に気にしなかった。
恵梨花は自分が食べるのはそっちのけで、亮の皿に次々とおかずやおにぎりを載せたり、お茶を入れたりしている。亮が「自分で取るぞ」と言っても、「いいから」と断り、恵梨花はニコニコとご機嫌な様子である。
亮としても不快感はなく、寧ろ欲しいものが欲しいタイミングで来るので、黙って受け入れた。
美味そうに食べる亮と、甲斐甲斐しく世話を焼く恵梨花の二人を、梓と咲は苦笑交じりに眺めている。
「――そういえば、君が助けた三人だけどね」
梓がそう切り出したのは、食事が終わって、亮が満足げにお茶を飲んでいる時だった。
「……俺か？」
何の話だ、と梓を見る亮。
「ええ」
「俺が何しただって？」
「助けたでしょ、先週」
「……？　誰を？」
梓はここでため息をついた。
「他の学校の生徒に絡まれてた男子。岡本、工藤、吉田の三人！」

そんな訳のわからない名前を挙げられても、というのが亮の偽らざる心境である。
「何言ってんだ、あんた。俺は男なんか…………そういえば、助けたな」
亮は途中でようやく思い出した。
「六人も相手に喧嘩したのに、つい先週のことなのに、なんで忘れてるの？」
「まったくね、つい先週のことなのに」
恵梨花の言葉に梓があいづちを打つ。
「……仕方ねえだろ。『助けた』なんて言うから、女の子のことかと思ったんだよ」
亮が不満そうに口を尖らせる。それを見て、恵梨花と梓は顔を見合わせた。
「……亮くんって、本当に普段から男の子は助けないのね」
「みたいね。その理由を聞いてなかったら、どこの女ったらしの発言かと思うわ」
女ったらしとは随分とひどいなと亮が苦笑すると、梓は思い出したように口を開く。
「でも、よく考えたら、忘れていても仕方ないかもね」
「なんで？」
不思議そうに聞く恵梨花に、梓はニコッと微笑んだ。
「あれは、亮くんが恵梨花に愛の告白をした日だもんね」
「……！」
途端に恵梨花は顔を真っ赤にする。

「！　……ゲホッ、ゴホッ」
亮は飲みかけのお茶を噴き出しそうになって盛大にむせた。
「恵梨花に告白したことに比べたら……男三人を助けたことなんて、印象に残らないわよね？　ねえ、亮くん」
「あ、あんたな……」
梓は慈愛に溢れた微笑を亮に向けている。
亮は口元をヒクつかせた。恵梨花は真っ赤になったまま俯いている。
さらに梓は、しまったといった顔で額をパチッと叩くと、しみじみと首を横に振った。
「告白だけじゃなかった……お互いに熱く、そして強く抱きしめ合った日でもあったよね」
これまた、実にいい微笑みを浮かべている。
「……って、そ、その三人がどうしたんだ？」
亮もいろいろと思い出して恥ずかしくなったので、無理矢理話の流れを戻すことを試みた。
すると梓はポン、と手を叩いた。
「そうそう。その三人の怪我なんだけど、先週の金曜日……恵梨花が亮くんに公開告白をした日だけどね。ああ、告白の時の恵梨花の可愛さときたら……特に亮くんが返事をした後なんか……！　二人のために遠慮したとはいえ、あの場にいなかったのが本当に悔やまれるわ」
亮の試みは一瞬成功したかに見えたが、結局は失敗に終わったようだ。

「ちょ、ちょっと梓……！」
耳まで真っ赤にした恵梨花が親友を止めようとようやく顔を上げた。
すると梓はどこから取り出したのかデジカメを構えて、パシャパシャと恵梨花を撮り始める。その流れるような動きから察するに、いつでも撮れるよう、デジカメは起動済みだったのだろう。
ぎょっとした恵梨花は慌てて顔を背けたが、遅かったようだ。その証拠に、梓はひと仕事終えたように満足している。
しかし梓は、すぐにそんな満足顔もデジカメも引っ込めて、しれっと言った。
「あ、岡本くん達三人の怪我だけどね。金曜日は随分と痛そうだったけど、今日見たら、そこそこ回復してたみたいよ……ねえ、恵梨花。けっこう大丈夫そうだったよね？」
恵梨花に顔を向けた梓は、いつも通りの微笑を見せていた。
「あ、あんたって……」
恵梨花は少し涙目である。目がプルプルしている。
二人の美少女がやりあっている間に少し落ち着きを取り戻した亮が、疲れたような声で聞いた。
「………あんたが言いたかったのは、つまり、その三人の怪我がよくなったみたいだってことだけか？」
「そう、それだけ」
「そうかよ……」

あっさりと頷く梓に、亮はうなだれ、大きく息を吐く。
「君が助けたんだから、一応知らせとこうと思ったんだけど。忘れてたぐらいだから、どうでもよかったみたいね」
「まったく、その通りだ」
亮は大きく頷いた。男の怪我の具合なんて、心底どうでもよかった。
「そうそう、喧嘩で思い出したけど……君は何か武術を習っているわよね？」
今までの会話の流れを無視して、梓から唐突な質問が飛んできた。それは質問というよりも確認に近い。
「……習っていたというか……気づいたらやってたってやつだな」
亮は記憶を探りながら答えた。
「それって、小さい頃からってこと？　物心つく前から？」
親友の蛮行に対してちょっと拗ねていた恵梨花は、今度は一転して、好奇心を露わにしている。
梓は恵梨花の機嫌をよくするためにこの話題を振ったのだが、彼女の狙いは見事に功を奏した。
恵梨花は亮のことなら何でも喜んで話を聞くからだ。
「ああ。そういや、言ってなかったか……家が道場やっててな、それで俺もいつの間にかやってたな」
「そうなんだ。すごいね、家が道場なんて！　……でも、そんなに意外じゃない？　ううん、寧ろそっちのほうが自然かも……」

「？　何が自然なんだ？」
「だって……亮くんが真面目に道場に通っている姿なんて想像できないっていうか。めんどくさがったりしてそう」
恵梨花は少し言いにくそうに、同時にそれを誤魔化すように、苦笑いを浮かべている。
「そいつはちょっと、ひどいんじゃねえか？」
亮は傷ついた表情を見せるが、梓が恵梨花に賛成して手を挙げた。
「あたしも恵梨花と同意見」
「私も」
咲にまで賛同されて、亮は大きく肩を落とした。
そこまで自分は面倒くさがりの人間に見えるのだろうか——葛藤し始める亮に構わず、梓が追い討ちをかける。
「ふむ……最初から道場に通っている、もしくは通っていた、と予想していたけど。本人の口から聞くと、やっぱり意外に感じるわね」
最後はニヤリとしながら、からかうようだった。
「……もう、好きに言ってくれ」
投げやりな態度を示す亮がおかしくて、恵梨花と咲が静かに肩を震わせている。
「それで、君の家がやっている武術って何なの？　やっぱり足技が主体の？　テコンドー？　キックボクシング？　ムエタイ？　それとも意外なところでカポエイラ？」
梓がいつにないほど前のめりになって、次々と格闘技の名を挙げる。
少し興奮しているようにすら見えるので、亮は呆気にとられた。恵梨花と咲も亮と同じような顔をしていることから、梓がこうなるのは珍しいのだろう。
「いや、違う。うちがやってるのは古いのが自慢みたいな古武術で、足技が主体でもない……でもなんでまた、足技主体なんて思ったんだ？」
すると梓は、驚いて目を瞠（みは）る。
「足技が主体じゃない……？　じゃあ、君はその古武術の中で、特に足技が得意ということ？」
「？　いや、得意でもない。なんでそう思うんだ？」
少し困惑気味に眉根を寄せる梓。
「だって、君、六人相手に喧嘩（けんか）した時も足しか使わなかったし、話に聞いただけだけど、恵梨花を助けた時もそうだったらしいじゃない」
「……そういえば、そうだったね」
恵梨花も思い出したようだ。
梓の言う通り、確かに亮は、恵梨花達の前で喧嘩をした時に足しか使っていない。
「……ああ、そうか。他人の目にはそう映るのか……そりゃそうだな」
「別に蹴りが得意って訳でもないの？　亮くん」

恵梨花は良くわからないといった様子になる。
「ああ、違う……寧ろ足技は苦手なほうでな」
苦笑しながら亮が答えると、三人娘は揃って絶句した。
「ちょ、ちょっと待って、君」
最初に立ち直ったのは梓だった。その素早さはさすがだが、それでもまだ狼狽気味だ。
「じゃ、じゃあ、君は……得意でもない、寧ろ苦手な足技だけで六人も倒したと、そう言っている訳？」
「そうだな」
「な、なぜ、そんな……？」
梓の困惑は相当なもののようだ。亮は見ていて少し愉快に思えてきた。
「じじいが――俺のじいさんが道場の師範でな。まあ、最高責任者みたいなもんか。そのじじいに、素人を相手にするなら、緊急時以外は手を出すなって言われててな」
亮がそう答えると、三人娘は訝しげに押し黙った。
「……ええと、亮くん。それはつまり、素人相手に喧嘩をするなっていうことだったんじゃないの？」
恵梨花がそう思うのももっともだなと、亮は苦笑する。
「いや、文字通り『手』を『出すな』でな――『手を使うな』と言う意味だ。親父にも言われてたんだが、売られた喧嘩はいくらでも買っていいけど、お前は足技が苦手なんだから、素人を相手にする時は、足だけで対処して練習台にしろって。大したことのない相手でも、ナイフとか出されたら、それこそいい経験――ラッキーだと思えって言われ続けてきた。何が活きるかわからないのが実戦経験だってな」
恵梨花は亮が「親父」と口にした瞬間、ピクッと反応した。亮が家族を話題に出すのは珍しかったからだ。
しかし亮はそれに気づかず、「困ったじじいと親父だろ？」と言いたげに笑った。
「練習台って……随分と変わったおじい様と、お父様みたい。それに普通、道場とかで武術を習っている人は喧嘩してはいけない、とよく聞くけど……」
呆れ顔を見せる梓に、亮は肩を竦めて返した。
「うちの場合は、自分から喧嘩を売るような真似さえしなければ、それほど問題にはならねえかな。買った場合も、やり過ぎないように、と注意されてるだけで」
「ふむ……人の道場のやり方にあれこれ言うつもりはないけど……で、君は本当に足技が苦手なの？」
「苦手と言っても、手技に比べたら、って話なだけだ」
つまり、亮は足技中心で闘うよりも、手技中心で闘うほうが得意だと言っているのである。
「六人を軽々と蹴り倒した足より、手のほうがすごいって……」
梓は何と言ったらいいか、という顔をしている。

恵梨花は感心することしきりの様子だ。
続けて梓は問いかける。
「……君って、一体どれだけ強いの？」
「んなこと聞かれてもな」
どう答えたらいいもんか、と亮は難しい顔で頭をガシガシと掻いた。
「──まあ、素人には負けないと思うぜ？」
明らかに適当な答えだ。恵梨花だけがクスリと笑った。
亮の言い分は、三人娘にはわかりきったことである。
もうちょっとまともな回答を引き出そうと考え、梓は口を開こうとした。だが、咲が興味深げに亮の袖をクイクイと引っ張ったので、梓は口をつぐんだ。
「どうした、咲？」
亮が振り返ると、咲は指先までピンと伸ばした腕を肩の高さまで上げ、肘から先を上下に動かして見せた。
「……割れる？　瓦」
咲のロボットのような動きを訝しげに見ていた亮は、最後の一言でようやく意味を理解した。
「ああ……手刀で瓦を割れるかって？」
咲はコクと頷き、亮をジッと見上げる。

立ち読みサンプル
はここまで

亮には、咲の目が妙にキラキラしているように見えた。
「手刀で割った経験はないんだが……多分割れると思うぞ」
亮がそう言うと、咲は期待を込めた目で亮を見つめる。
「……見たいのか？」
コクコクと咲が頷く。もしも尻尾があったら、ブンブンと揺れているのではないかと思うほど、咲の顔には期待が溢れていた。
「あ、私も見たい！」
「あたしも」
恵梨花と梓が手を挙げて便乗した。
亮は無言で二人を眺め、それからまた咲を見た──期待に胸をふくらませている咲を。
そしてつい、亮はため息をついてしまった。
正直なところ面倒くさいと思ったが、咲の純粋な眼差しに、「こりゃ、とても断れない」と悟ったのだ。
だから亮は、苦笑いを浮かべてこう言った。
「まあ……機会があればな」

◇◆◇◆◇◆◇